



NPO たがやす齋藤事務局長インタビュー全編

市の農業を支える抱負

齋藤：もともとは、都市農業を市民として、どうやって守っていくかということから始まりました。当時、町田市には1000人以上の農業者がいましたが、都市農業についてなかなか語られないのと、農業者が高齢化や担い手不足で、このままでは出荷ができなくなるのではないかという心配がありましたね。

そこで、私たち市民に何ができるかということをお農家さんと色々話したところ、手伝いに来て欲しい、ということで「援農」という形で農家さんにお手伝いに行くことになりました。

その頃、一般の人は農地を借りることが困難であった為農家さんに引っ張ってもらわないと町田の農地が無くなってしまわないか、という危惧がありました。

また、そのころから「地産地消」を推進していた私たちは純粋に国産のもの、正しく作ってあるものが食べたかったです。

いろいろ勉強して、農家さんのところへ行かせてもらおうと、「担い手がいない」とおっしゃいます。野菜の価格が非常に安かったりするんです。農業をやっていくことの難しさも市民として全然知らなかったし、いろんな勉強にもなりました。そこで、「よし、町田の一般市民がもっと農業を知るべきだ」と思いました。

農家さんも市民が何を望んでいるか、例えば「農薬をたくさん使ったきれいな野菜」ではない野菜を望んでいるということも知ってほしい。そんな風に双方のコーディネートができればいいなと思いました。

抱負という大層なものではなく、町田の野菜を町田の人が食べて、そして農家さんが維持できるように、という単純な思いでやっています。

市民と農業をもっと身近にしたい

齋藤：町田市がいろんなテレビとかマスコミに出るとき、イメージとして「農業」「農地」

とか「里山と都市」があると思います。ただ畑が身近にあるかと言えばそうでもなかったりして、案外近いような遠いような…。

例えば、私たちが町田の人に、「北部丘陵の農家さんでナスの収穫をしませんか」というと、「北部丘陵ってどこですか」と言われます。北部丘陵って、小野路・小山田辺りの丘陵地です。そこで、ここ数年農家さんに頼まれて早朝のナスの収穫をしています。参加されるのは、ほとんどが多摩市、八王子市の人です。

市民と農家をつなぐコーディネート

職員：苦勞された点や、やっつけて良かった点はどういったところですか。苦勞された点の方がいっぱいあるかと思いますが…。

斉藤：やっぱり、農家さんと市民との相性がありますね。「手伝ってあげてる」「使ってあげてる」という認識があるとうまくいかないです。そういうことが初めのころはありましたね。だんだん、お互いに理解して、上手くいくようになりました。

今でも、援農などをしてほしい人をコーディネートするときには、必ずお会いしてどういう方かというのを見極めてから、農家さんにご紹介しています。今は残念なことに、新型コロナウイルスの感染防止で、お会いすることがなかなか難しいのですが。

新型コロナウイルスの影響で、援農ボランティア育成事業についても半年お休みしました。本来ならそこに援農という形で農業体験してもらって、作業の感覚を覚えてもらうのですが、それもできない状況です。夏の暑い時は、やっぱり皆さん無理があるので、一回で辞めちゃう人が多くて、非常に苦慮していますね。

良かったことと言えば、いろんな人と接すること、知り合えたことと、両方から「ありがとうございます」というんじゃないけど「よかったよ」なんて言われることです。

でも何より、一人でも多く農業を体験してもらう人、体験して知る人が増えたことが、やっぱり嬉しいです。

農業を体験してみしてほしい

斉藤：一回でも体験してみてください。本当に現実とは違うから…。マスコミでやるような「素敵な農家」はあり得ないと思います。そんなことばかりやっていると、現実と違うのですぐ辞めちゃう人がたくさん出てきます。

なぜ日本がこんなに自給率が下がって、私たちが援農に行かなきゃいけないくらいに、都市農業ですら人がいないのか。後継ぎがないのか。そういう問題をもっと考えるべきだと思います。

だから、現実とのギャップはあるけれども、まずは体験してほしい。そうすれば、農業をやる人にならなくても、(町田産農畜産物を)「買う人」になりますよね。買えば、自給率がち

よっと上がるし。ただ、町田の農家数で町田の供給はできないので、やっぱり他から頼らなきゃならないけども。

まずは、「こんなに野菜っておいしいんだ」っていうことを知ってほしい。今日もまち☆ベジをやってますけど(編集註：インタビュー当日は市役所まち☆ベジ市の開催日)、そういうところに来る人ってごく一部なんです。うちの直売所でも販売してますけど、「やっぱり斉藤さんとこの野菜よね、安全だしおいしいし」って、知ってる人しか来ないから。それがもっと広まればいいなあって。

「野菜は安いもの」という意識を変えたい

斉藤：今度、町田薬師池公園四季彩の杜西園に直売所ができましたね。農家さんも直売所を畑でやっていますが、価格を100円とか50円とか、おつりが出ない程度にしてしまっているんですね。買う人が「野菜って安いんだ」って思っちゃう。

うちの援農に行った人たちが、自分が作った野菜がスーパーとかに並んでいるのを見て「びっくりしちゃった、あまりに安くて」って言うんですよ。「僕あんなに苦労したのに。やっぱり野菜って安いんですね」と。

市民の人たちも農作業に参加してもらおうと、「え、こんなに大変なことやってこんだけですか」みたいにわかってもらえます。それが少しずつ広まっていけば、市民が適正な価格で買うわけですよ。

町田は農業と触れ合える場所

斉藤：町田市ってほかの都市と比べて、農業と触れ合うことができる(機会が多い)まちなんです。研修農場、体験農園、市民農園がある、というのはなかなか無いんです。

だから、いずれ農業をやりたい人のほかにも、例えば都内の老人施設の介護士さんが、「土をいじることがすごく認知症とか高齢者にとっていいことだからやりたい」と来られます。都内に(研修農場が)ないのって言ったら、ないって言っていました。

だから、町田市ってすごいんですよ。そういう意味では。

職員：農の担い手を育てるために、援農ボランティアを育てる事業をたがやすさんでやっていて、それと並行して町田市の研修農場もあります。行政の方で用意しているものもあれば、こういった民間の活力というか、NPOさんのお力を借りてそういった農に触れられるような機会、そういったものを農業振興課としてもなるべく多く設けていきたいというところで頑張っています。

この研修農場は、都内でもやっている自治体は、無いんです。最近では東京都が八王子市で始めたりはしていますが…。

齊藤：町田の農業研修が、農業振興・農業施策として東京都より進んでやっているというのを、ほかの市に自慢したいですよ。中にいるとわからないですよ。案外、今回こういう記事を出すことによって改めて、町田市民が「そうなんだ」と思ってもらえると嬉しいな、と思います。

いろんなアプローチを検討中！

齊藤：ほかにも、いろいろ体験する「まちだ都市農業チャレンジ！」なんかを検討しています。

職員：「まちだ都市農業チャレンジ！」は都市農地、生産緑地を今後どうやって維持していくか、農地が農地として残されるためにはどうしたらよいか、という問題に、ひとつのアプローチとして市民の活力を借りて維持していこうというもので、アプリを使って、一時間くらいの農作業体験の参加者を集うという企画の準備をしています。

農家さんの重労働が少しでも軽減され、市民の皆さんも農業を知る「きっかけ」としてこのような取組が盛り上がっていけば、町田市内の農業を元気にしていけると考えています。

齊藤：市もいろんなことを考えてますからね。そうやって、まず知っていただく、体験する機会を増やすことを進めていって、「町田って面白いところだよ」っていう風に思ってもらえたら、いいんじゃないかなと思います。
